

# 職人およびエンジニアと立体造形作家の共創についての研究と実践 — 製造業と現代美術の融合の価値 —

s1322920 東 弘一郎

## 博士論文要旨

本論文は、立体造形作家が職人やエンジニアと共創することによって生じる作品の変化と価値に関する研究である。筆者は主に金属を用いた立体造形作品を制作している。金属を扱う作品において、強さと美しさを高い精度で表現するために職人・エンジニアの技術は不可欠である。筆者の作品の多くは体験型であり、鑑賞者が体験することにより、立体造形作家以外の新たな「思い」が生まれる。体験型であるので必然的に最高度の安全性が求められる。鑑賞者や自然の思いがけない動きを想定し、安全を確保しながら作品のメッセージや造形を損なわない表現方法は、専門家の指導や介入無くしては難しい。高い安全性のもと「自由な表現」の幅を広げて多くの方に作品を鑑賞してもらうためには、職人・エンジニアと立体造形作家が相互に理解し制作する「場」が必要なのである。しかし、作家自身の作品に必要な技術は何か、作品制作に合った技術を持つ職人・エンジニアはどこにいるのか見当もつかず、表現を諦めてしまう作家もしばしば見受けられる。

本研究は、筆者自身の制作過程で生じた職人やエンジニアとの関わりが背景となっている。その事例を研究することで、共創の可能性とそれによってあらたに生まれるアートの価値を検証する。まず、現代美術と製造業双方が専門性をいかして共創する相乗効果により、作家の最初の構想以上の結果が生みだされるということを主張する。次に、作品制作に関わる人たちに共通認識を持たせる仲介者の役割を持つ専門家の重要性を示す。さらに、筆者の経験から、スケールの大きな作品やプロジェクトの構想において、作家のコンセプトが職人・エンジニアに共通認識として共有され、その技術を活用する「共創の場」の必要性や価値はどのようなものかを検証する。以上、さまざまな場面での検証、および職人・エンジニアと立体造形作家の共創を分析・考察することで、製造業と現代美術の融合の価値を明らかにしたい。

本論文は全7章、本論全4章の構成で展開する。

序論では、本論文全体の構成、本研究に至った背景と目的、本研究における基本的な前提、問いと方法、先行研究と本研究の立ち位置と新規性について述べる。本論の第1章から第4章では「職人・エンジニアと立体造形作家の共創とはどのようなものか、共創によって成立する製造業と現代美術の融合の価値はなにか」という問いを立てる。そして、各々の事例において立体造形作家が職人やエンジニアと関わることでもたらされる技術とはどのようなものか、作品がどのように変化していくのか、彼らと関わることでアート作品にいかなるあらたな価値をもたらすのか議論する。また、「共創」が職人・エンジニアと立体造形作家との「ものづくり」を通じたコミュニケーション方法であり、そのような「場」の必要性についても事例を挙げながら明らかにし、製造業と現代美術の融合の価値について検証していく。

第1章では「職人・エンジニアとの共創から作品にもたらされる技術と価値」をこの研究の背景となる筆者の実践事例から明らかにする。また、その技術の継承や習得の様相を、日本の

ものづくり産業における実態や、芸術を学ぶ学生や企業の取り組みをとおして確認する。

第2章では「職人・エンジニアと立体造形作家との共創への手がかりと工夫」について事例を上げつつ、先行研究から職人・エンジニア、立体造形作家双方の視点から考察する。まず、立体造形作家にとって、職人やエンジニアとの関わり的重要性を示す。しかし、相互に関わりを持つ機会があったとしても、作家の「自由な表現」の実現につながらないことも珍しいことではない。それらの解決の手がかりと工夫、そして両者が関わることで生まれる変化や成果について考察する。また、構想を具現化しようとする際に発生するテクニカルな問題に対して、その解決を請け負う専門家とその仕事を紹介する。さらに、作家が直接作品制作しない発注芸術について自らの体験も交えて考察する。

第3章は職人・エンジニアと立体造形作家による共創の成果について述べ、考察する。

第4章では、アートと職人の共創の場を醸成する試みとそのプロセスを、アートプロジェクトで共創した工場の職人たちへの取材や様々な事例を用いて述べる。最後に、筆者自身の工房である「株式会社あずま工房」の実践を通して、「共創の場」の必要性を考察する。

結論では、第1章から第4章までの調査・考察を踏まえて、立体造形作家と職人・エンジニアの共創によっていかに作品が変化し新たな価値が生まれるのかについて論じ、それぞれの専門分野である製造業と現代美術の融合がいかに可能となるのか検討する。また、職人・エンジニアの育成や継承、その技術と立体造形作家のニーズをマッチングさせるための工夫は、本論の今後につながる課題であることを述べる。

補章では、本論文の研究実践の成果として博士審査展出品作品《人間エンジン》について論述する。

製造業との共創プロセスは、現代美術の新たな方向性を示している。共創により、製造業と立体造形作家がヴィジョンを共有し構想を具現化することは、現代美術にさらなる価値を与えていく意義があることを述べ、論を閉じる。